

長崎県対馬島における殿崎遺跡の発見と黒曜石石器

堤 隆・諏訪間順・中沢祐一・Daniele Petrella

資源環境と人類 第15号 137-141頁 2025年3月
Natural Resource Environment and Humans
No. 15 pp. 137-141. March 2025

長崎県対馬島における殿崎遺跡の発見と黒曜石石器

堤 隆^{1*}・諏訪間順¹・中沢祐一²・Daniele Petrella³

要 旨

日本列島九州北部の日本海域、長崎県対馬島において筆者らが実施した考古学的調査で、対馬島北部の岬の先端において、黒曜石製の石器を確認し、新たな遺跡を発見した。遺跡名は、岬の地名を取って殿崎遺跡と名付けた。

石器は楔形石器に分類でき、縄文時代のものと考えられる。この黒曜石石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析による原産地推定を予備的に行ったところ、遺跡より直線距離で約160km離れた佐賀県腰岳産の黒曜石との推定値がだされた。この黒曜石は、九州島北部より玄界灘を舟で越え、殿崎遺跡までもたらされたものと考えられる。

対馬島北端部は、朝鮮半島まで約50kmの距離にあり、このような腰岳産黒曜石石器の発見は、朝鮮半島までを視野に入れた黒曜石供給の解明のための足掛かりとなるだろう。

キーワード：対馬島、殿崎遺跡、楔形石器、腰岳産黒曜石

1. 対馬の地理的位置と殿崎遺跡

長崎県対馬島は、日本と韓国を隔てる対馬海峡の中央に位置する。対馬島は、その北部に位置する比田勝で九州博多より約150km、朝鮮半島から約50kmと、より朝鮮半島に近い地理的位置にあり、島の北端からは釜山が見えることが時折ある。対馬島は、南北に82km、東西に18kmと細長く、面積は約700km²となっている。

今回、発見された殿崎遺跡は、長崎県対馬市上対馬町西泊に所在し、比田勝港の北方に長く突き出た殿崎（戸ノ崎の別称もある）と呼ばれる岬の先端付近に位置する（図1・図2）。遺跡は、Daniele Petrellaが代表を務めるイタリアIRIAE（International Research Institute for Archaeology and Ethnology）のチームによる対馬鬼ヶ崎の考古学的調査に参加した堤と諏訪間が、同殿崎の踏査を行った2024年8月5日に、地表に黒曜石が露出しているのを見とめ、発見に至った（図3・4）。

2. 対馬の縄文遺跡とその考古学的調査

対馬島域の遺跡調査は、対馬市教育委員会による調査のほか、対馬在住の長崎章・長崎菜々子らにより丹念になされており（長崎・長崎菜 2023）、従来確認されていた30遺跡に加え20遺跡が確認され、50遺跡程を数える（表1）。縄文遺跡は、対馬全体に存在するものの、どちらかというと島の北部域（上県）に多いようである。もっとも古いものが縄文早期であり、以降晩期まで確認される。集落遺跡のほか、志多留貝塚のように貝塚遺跡もある。佐賀貝塚では、国内でも数少ない鹿笛の出土も知られる。越高遺跡では、朝鮮半島の土器型式である隆起文土器や朝鮮式の炉も発見され、半島との交流も示唆される。

こうした対馬における縄文文化の実態解明と半島との関係性を明らかにするため、2022年、イタリアのIRIAEチームは、旧上対馬町の鰐浦の北東の岬の先端、

1 明治大学黒曜石研究センター 〒101-8301 東京都千代田区神田猿樂町1-6-3 明治大学猿樂町第三校舎

2 北海道大学大学院医学研究院 〒060-8638 北海道札幌市北区北15条西7丁目

3 International Research Institute for Archaeology and Ethnology (IRIAE) Via Mezzocannone 109, 80134, Naples, Italy

* 責任著者：堤 隆 (tsutsumikoko@gmail.com)

受付：2024年12月2日 受理：2024年1月9日

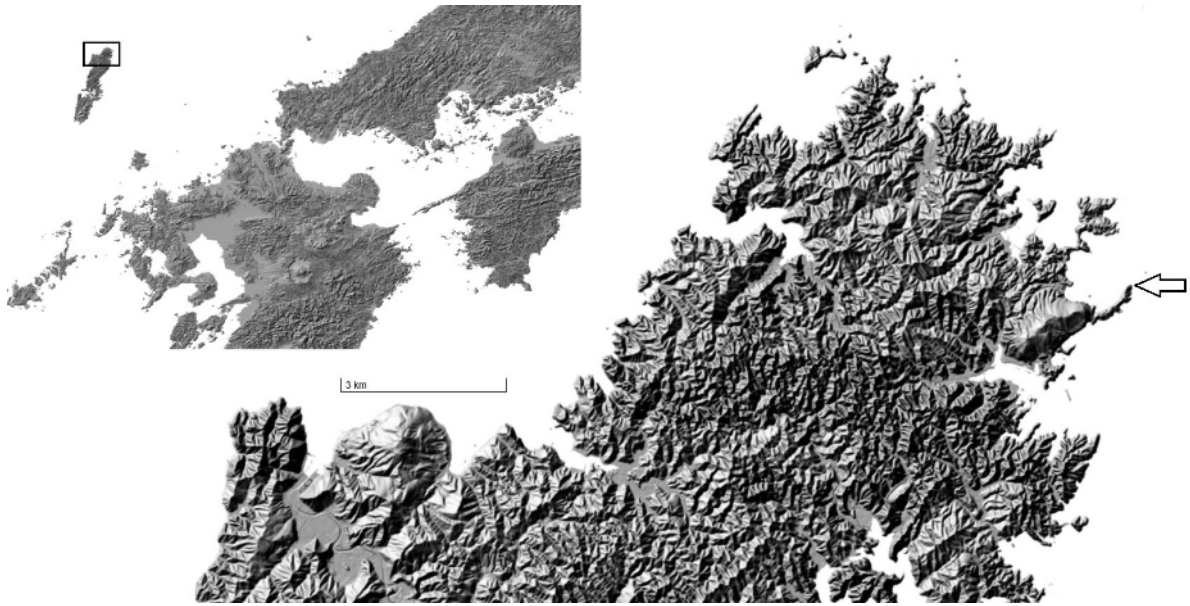


図1 対馬島と殿崎遺跡の位置（矢印）



図2 殿崎遺跡（細長く伸びた岬の突端付近）



図3 殿崎の石器確認地点



図4 石器の確認状況

表 1 対馬島の縄文遺跡

番号	遺跡名	時期	旧町名	番号	遺跡名	時期	旧町名
1	シレンナー		上対馬町	26	吉田	中期～晩期	峰町
2	泉		上対馬町	27	狩尾		峰町
3	五根緒		上対馬町	28	佐賀	中期・後期	峰町
4	古小鹿		上対馬町	29	佐賀貝塚	中期・後期	峰町
5	白浜崎		上対馬町	30	ウシツキ		峰町
6	鬼ヶ崎	早期～	上対馬町	31	和保		峰町
7	ヒロセ		上対馬町	32	ヌカシ	中期～晩期	豊玉町
8	不通浜～若宮神社西		上対馬町	33	西加藤	中期・後期	豊玉町
9	若宮神社		上対馬町	34	堂ノ内		豊玉町
10	若宮神社東～深浦		上対馬町	35	住吉平	後期	豊玉町
11	厚崎		上対馬町	36	多田越		豊玉町
12	舌崎		上対馬町	37	住吉橋下		美津島町
13	ハゲ島		上対馬町	38	大船越		美津島町
14	唐舟志西海岸		上対馬町	39	白蓮江第1		美津島町
15	五根緒赤崎		上対馬町	40	阿須		厳原
16	コウブリヤ洞窟		上県町	41	堀田サエ		厳原
17	志多留		上県町	42	久田		厳原
18	志多留貝塚	早期～後期	上県町	43	安神		厳原
19	越高	早期～前期	上県町	44	奥浅藻		厳原
20	夫婦石	中期～後期	上県町	45	下原		厳原
21	向サエ		上県町	46	在家		厳原
22	オオセ		上県町	47	小茂田		厳原
23	大浦		上県町	48	クノエ		厳原
24	刈生		上県町	49	西表		厳原
25	立岩		上県町	50	殿崎		厳原

※ （長崎章・長崎菜 2023）を元に作表

鬼ヶ崎遺跡の調査を開始し、現在継続中である。鬼ヶ崎遺跡ではこれまで、石鏃や楔形石器を含む多くの黒曜石石器が確認される。

石鏃の中には鋏形鏃がみられ、この遺跡の利用が縄文早期に遡る可能性がある。石器素材の中には、水晶製のものも多いが、この岬の岩脈中には水晶が生成され、中には良質なものも含まれるため、黒曜石など遠隔地石材に対し、在地石材として重宝されたと考えられる。海を見下ろす岬突端の立地や狩猟具としての石鏃の存在などから、遺跡は魚や海洋哺乳類の捕獲のために形成された可能性がある。

IRIAE では陸上調査のみならず、ダイビングによる海中調査もあわせて進めており、その全体像を明らかにできればと考えている。

3. 楔形石器

殿崎遺跡において確認された石器は1点で、図5に示した。黒曜石の楔形石器と認識され、最大長20mm × 最大幅18mm × 最大厚7mm、重量2.14gを測る。器種的に時代を決めることは困難だが、おそらくは縄文時代の所産と考えられる。

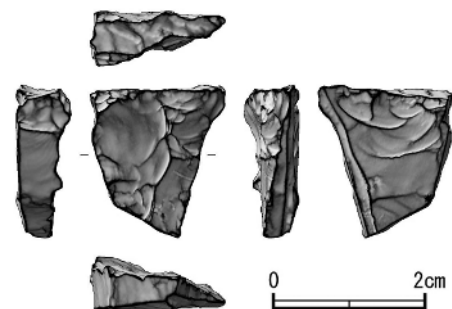


図5 殿崎遺跡の石器

明治大学黒曜石研究センターにおいては、現在、九州に分布する主な黒曜石原産地原石の基礎分析を終え、原産地推定のためのデータを整える終盤状況に入っている。したがって、今回は予備的な結果を提示することになるが、蛍光X線分析による原産地推定では、判別図の腰岳のエリアに収まった。肉眼的にも漆黒で透明感のない腰岳の黒曜石の質感をみせている。原産地分析の結果については、別途正式報告を行う予定である。

4. 結語

本稿では、対馬島の考古学的調査に伴って新たに確認された殿崎遺跡の黒曜石資料について報告した。石器は、楔形石器で、腰岳産の黒曜石と予備的に推定された。おそらく縄文の石器と考えられるが、中沢が研究を展開する黒曜石水和層による年代測定が可能になれば、時期的な位置づけも明確になろう。殿崎遺跡は岬の突端に位置し、IRIAEが調査を継続している鬼ヶ崎遺跡と同様な立地環境にある。おそらくは岬にあって海と対峙し漁労にかかわるような機能を有する地点であったと考えられる。

ちなみに鬼ヶ崎遺跡では、多量の石鏃も検出されており、漁労用刺突具としての用途も想定されるところである。石鏃の中には鏃形鏃もあり、縄文早期にはこの地で生業活動が展開していたことを示す。鬼ヶ崎遺跡の黒曜石は、肉眼では、腰岳産とみられる漆黒の黒曜石に混じって、特徴的な灰色を呈する姫島産黒曜石と思われる石器が散見される。遺跡から姫島までは約230kmあり、腰岳までの160kmよりさらに距離があり、ベクトルも異なる。長崎県内で黒曜石の原産地分析を精力的に進めている川道寛の教示によれば、対馬では夫婦石遺跡の黒曜石全点の原産地分析を終えており、未報告ではあるがやはり腰岳産の黒曜石がみられるという。また長崎菜々子により、すでに対馬島内の黒曜石原産地同定の試験的研究もあるが（長崎菜 2020）、今後、鬼ヶ崎の考古学的調査の展開と出土黒曜石石器のまとまった原産地推定が重

要になるものと考えられる。

一方、朝鮮半島では、南部の沿岸地帯を中心に、新石器時代においては梨琴洞、長興里集賢、新華里遺跡（芝 2022）、東三洞・凡遺跡（川道ほか 2023）、旧石器時代においては新北遺跡で（Lee and Kim 2015）、腰岳産黒曜石が確認されていることから、対馬は先史時代において朝鮮半島への腰岳産黒曜石の搬出ルートとしての重要な位置を占めているものと考えられる。

朝鮮半島と古九州島を結ぶ重要ラインに位置する対馬島は、ことにサピエンスの最初期移動の要となる場所であるが、現在までに旧石器遺跡は確認されていない。今回、その重要性に着目した明治大学黒曜石研究センターの堤・諏訪問が、IRIAEの調査に合わせて、仮踏査を行った。長崎らの丁寧な調査をもってしても確認が困難であることを考えると容易ではないが、継続して旧石器時代遺跡の発見に努める必要があろう。

謝辞

本報告にあたっては、対馬で丹念な遺跡調査を続ける長崎章・長崎菜々子氏、長崎県内で黒曜石原産地推定を進める川道寛氏にご教示をいただいた。また、(株)アルカには石器の図化協力をいただいた。厚く御礼を申し上げる次第である。

引用文献

- 川道 寛・金恩瑩・白石溪牙 2023「東三洞貝塚・凡方遺跡出土の黒曜石産地同定」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』13：1-9
- Lee, G.K. and Kim, J.C., 2015 Obsidians from the Sinbuk archaeological site in Korea - Evidences for strait crossing and long-distance exchange of raw material in Paleolithic Age, *Journal of Archaeological Science: Reports* 135(1): 458-466
- 長崎 章・長崎菜々子 2023「対馬の縄文時代遺跡の報告 - 対馬北部の新遺跡・黒曜石に魅せられて -」『西海考古』13：101-126
- 長崎菜々子 2020「対馬黒曜石の調査・分析による産地推定 - 対馬の原始・古代の交易を知る -」『鳥居龍蔵生誕150周年記念 全国高校生歴史文化フォーラム』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編, pp.1-25 徳島
- 芝 康次郎 2022「腰岳黒曜石原産地」『旧石器電子辞書』<https://note.com/001317/n/n0b60b62d265c>, 2024 年 11 月 20 日引用

Discovery of the Tonosaki Site and an obsidian artifact on the Tsushima Island

Takashi Tsutsumi,^{1*} Jun Suwama¹,
Yuichi Nakazawa², Daniele Petrella³

Abstract

This report discusses an obsidian artifact collected from the northern tip of Tsushima Island, Nagasaki Prefecture, in the Japan Sea off northern Kyushu. This location has been newly identified during our excavation campaign at the Tonosaki Site. The collected artifact is classified as the *pièce esquillée*, attributable to the Jomon Period.

An application of the energy-dispersive x-ray fluorescence analysis shows chemical signatures that are identical to the Koshidake source in the Saga Prefecture, located approximately 160 km away from the Tonosaki Site. This suggests that the obsidian was transported over the Genkai Strait through seafaring. As the northern end of Tsushima Island is approximately 50 km to the Korean Peninsula, our identification of Koshidake obsidian will provide a basic data set to understand the prehistoric society in which obsidian may have been circulated as far as the Korean Peninsula.

Keywords: Tsushima Island, Tonosaki Site, *pièce esquillée*, Koshidake obsidian

(Received 2 December 2024/Accepted 9 January 2025)

¹ Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-6-3 Kanda-sarugaku-cho, Chiyoda, Tokyo, 101-0064, Japan

² Faculty of Medicine, Hokkaido University, Kita 15, Nishi7, Kita-ku, Sapporo, 060-8638, Japan

³ International Research Institute for Archaeology and Ethnology (IRIAE) Via Mezzocannone 109, 80134, Naples, Italy

* Corresponding author: T. Tsutsumi (tsutsumikoko@gmail.com)

